

小林秀雄と京都学派

——昭和十年代の歴史論の帰趨——

綾 目 広 治

小林秀雄が歴史を主題とした批評を発表したのは、昭和十三年十月号の「文学界」にその一部が掲載され、後に単行本『ドストエフスキイの生活』（昭14・5）に「序」として収録された「歴史について」が最初である。それまでの小林秀雄の批評には、歴史を対象として扱ったものはほとんどなかったことを思うと、この発表は、唐突の印象さえ受ける。しかし、昭和十年八月号の「経済往来」に掲載された「私小説論」（第四章）では、伝統の問題が比較的大きな比重をもって論じられていて、この昭和十年、あるいはその少し前あたりぐらいから、小林秀雄の中には、すでに伝統、さらには歴史への関心が芽ばえていたことを知ることができる。つまり、小林秀雄は、この時期あたりから歴史の問題に関心を持ちはじめ、それがやがて、「歴史について」というまとまった歴史論となつて提出されるにいたつたというふうに考えられるのである。

その契機の一つに、「ドストエフスキイの生活」があつたことは言うまでもないであろう。昭和十年と言えば、「ドストエフスキイの生活」が連載されたはじめの年である。過去の歴史上の人物をいかにして文字の上に再生させるかという伝記の問題を通して、小林秀

雄は、広く歴史一般の問題と取り組まざるをえなかつたと考えられる。だからこそ、「歴史について」が、『ドストエフスキイの生活』の「序」として収録されたわけである。小林秀雄が歴史を主要な関心事としていつた内的必然性の一つは、まずはそのあたりに求めることができるであろう。

しかし、その時期、そしてその歴史論の内容を考えると、小林秀雄が歴史論を中心的なテーマとしていつた経緯は、単に「ドストエフスキイの生活」が機縁となつているだけでなく、当時の社会状況、さらには、それを敏感に反映した同時代の思想界の動向と密接な関連があつたと思われるのである。

本稿では、このような観点から、小林秀雄の歴史論と同時代の思想界の中心的存在であつた京都学派の歴史論（歴史哲学）との関連性を考察し、さらに、その両者の歴史論の帰趨を追つてみたい。

ただし、あらかじめ断つておくと、京都学派と言う時には、三木清や戸坂潤なども含める場合もあるが、ここでは、西田幾多郎や田辺元といった中心的存在、および、座談会「世界的立場と日本」〔中央公論〕昭17・1）に参加したグループを指すことにする。いわゆる狹義の京都学派である。

まずは、昭和十年前後の思想界の動向から見ていこう。

橋川文三氏は、「昭和十年代の思想」⁽¹⁾で、満州事変以降の内外の危機感が歴史意識の発生を促し、本来の歴史意識が発達するのは、近代日本においては、満州事変から日中戦争前後にかけての時期が最初であると述べている。橋川氏によれば、本来の歴史意識とは、普遍史や西期^{ヒストリイ}についての意識などを含んだものであり、とくに西期の意識はマルクス主義の媒介によって一般化されたものだが、ともかくも、昭和十年前後の時期に、強固な歴史論を持ったマルクス主義に触発されつつ、一方、満州事変以降の危機的な歴史状況に促されて、歴史の問題が前景化してきたことは事実である。

とりわけ、思想界においてその傾向は顕著で、思想界は、いわば歴史哲学興隆の時期を迎えるのである。その様子を、植田清次は、昭和八年一月号「理想」の「一九三二年日本哲学界の回顧」のなかで、五・一五事件などの政治社会情勢の危機に触れた後、

歴史研究の機運は歴史そのものの転換期に見られる必然的現象である。この機運を反映するかのごとく、一九三二年の日本哲学界は歴史の哲学的解明を企てる幾つかの優秀な論案を得た。

と伝えている。そして、その「優秀な論案」として、高坂政顕『歴史のなるもの』(「思想」一月号)、三木清『歴史哲学』、「理想」の春季特輯号「歴史の諸問題」中の諸論文、高山岩男『歴史の類型』(「思想」七、八月号)などをあげている。この歴史哲学興隆の気運が、やがて昭和十年代において、樺俊雄『歴史哲学』(昭10)、高坂正顕『歴史的世界』(昭12)、高橋里見『歴史と弁証法』(昭14)、西田幾多郎『日本文化の問題』(昭15)、田辺元『歴史的现实』(昭15)

といった著作となって結実することは、すでに知られている通りである。歴史を主要なテーマとしていった小林秀雄の動きは、このような思想界の動向と連動していたと言えよう。

ただ、ここで注意したいのは、それらの歴史哲学の多くがドイツ流の歴史哲学を踏まえているということである。今あげた、三木清や樺俊雄の著作にはその影響が顕著であるし、また、高坂正顕の『歴史的世界』などにもその影を見ることができるとともに、高山岩男の「歴史の類型」は、その副題が「ヘーゲルの哲学史とドイツの世界観学説」となっており、ドイツイそのものを主題にしている。後に、高坂正顕は、座談会「世界的立場と日本」(昭17・1)で、歴史哲学が盛んであった時期について、「一番初めはリッケルト張りの歴史の認識論が盛んであった時代で、(略)その次がドイツ流の生の哲学とか解釈学といったものから歴史哲学を考へやうとした時代で、それが大体第二の段階と云ってよい。」と語っているが、その「第二の段階」の時期が、この昭和十年前後の数年間にあたると考えていいであろう。

当時の雑誌を見ても、たとえば、昭和九年一月号「理想」の「一九三三年日本哲学界の回顧」(小松堀郎)は、ドイツイ流行の動きについて、ドイツとともに「この国でもドイツイ研究は相当盛んである」と述べている。昭和八年がドイツイ生誕百年記念の年であったこともあるが、東大の「哲学雑誌」といった純然たる研究雑誌においても、同年十二月号に「ドイツイ生誕百年記念」の特集を組むなど、ドイツイに対する当時の思想界の強い関心をうかがわせる。また同雑誌では、昭和十二年ぐらゐまでひきつぎドイツイに関する論考を掲載しているし、一方、京大の「哲学研究」

も、この時期、ディルタイを意識した歴史哲学の論文を少なからず載せている。ディルタイ熱は、翻訳にも見られ、昭和十年前後の時期に十冊以上のディルタイの著作が翻訳出版されているのである。

しかし、さらに注意を促すならば、この時期、ディルタイの歴史哲学だけがクローズアップされたのではないということである。さきに紹介した歴史哲学の著作の多くが、ディルタイとともにランケ、ベック、トレルチなどにも言及しつつ論を展開しているのである。あらためて指摘するまでもなく、この系譜は、いわゆる歴史主義の系譜である。つまり、ディルタイ哲学の流行だけでなく、それを媒介にして歴史主義全体が興隆してくるのが、この昭和十年前後の時期であったと言えるのである。ディルタイ熱は、いわばその水門を開いたわけである。その流れは、やがてその主流をディルタイからランケへと移して行くわけだが、ともあれ、このような思想界の気運の中で、小林秀雄の歴史論は形成されていったと考えられる。昭和十年八月号の「文学界」後記で、小林秀雄は、次のように述べている。

近頃、ディルタイ、グンドルフ、クルチウス、ベルトラムといふ様な人々の翻訳が出る。ドイツ語が出来ないので名だけ聞いてゐて読んだ事がない人なので物珍らしく、片つばしから読んでみた。仲間面白く色々教はつた。

そして、「同じ時代の人々は大抵同じ様な事を考へてゐるといふ点で、説くところは納得がゆく」とも述べ、ディルタイ、およびその系譜に属する哲学者達の著作に親しんでいたことをうかがわせる。実際、私達は、「歴史について」において、ディルタイの歴史

哲学、あるいはもっとひろげて言うなら歴史主義の歴史論と相通じた歴史論を認めることができるのである。

三

「歴史について」は、歴史と自然との対比を基調にして、論が展開されている。

小林秀雄によれば、自然は、人間の「外部」にあるものだが、歴史は、「人間とともに始まり人間とともに終る」、あくまで人間的な事象である。したがって、この二つの世界を知るためには、二つの異なった能力が必要である。たとえば、「史料」という自然の「存在であると同時に人間の営みの産物でもあるものに、自然の破片を見ようとすることが、「人間を自然化しようとする能力」で、自然の世界に対応した「自然科学的な精神」である。それに対して、「史料」に人間の姿、その営みを想い描こうとするのが、「自然を人間化する能力」で、歴史の世界はこの能力よってのみ知ることができる。また、この能力は、単に歴史を観察するだけでなく、それを創り出す能力でもある。元来自然は人間化に応ずるものではないので、人間化された自然とは、その能力よって創られたものだからである。つまり、「歴史は歴史といふ言葉に支へられた世界」であって、存在によつて支えられた自然とは違ふのである。

自然に対する歴史の特徴をさらに言うならば、それは、出来事の特異性、その一回性にある。たとえば、「子供を失つた母親に、世の中には同じ様な母親が数限りなくゐると語つてみても無駄」なのであって、子供の死という「一事件の比類の無き」に歴史の本質がある。言い換えれば、自然の世界では「自然常数」を目指すことが

可能だが、歴史の世界では「歴史常数」というものは成り立たないのである。また、その母の悲しみによって想起された死児の顔、すなわち歴史事実は、客観的とも主観的とも言うことができなない。そこがまた、客観的存在を想定できる自然の世界と異なるところである。したがって、常数や客観性が成り立たない歴史の世界では、科学は不可能である。

時間も、歴史と自然とはその性質が違う。過去と未来は、歴史の世界では「思ひ出と希望との異名」であって、これは人間の「生活感情」が生み出したもの、すなわち人間の「生」が歴史の時間を発明したのである。人間は、「未来への希望に準じて過去を蘇らす」のである。

要するに、人間の「生」そのものが歴史であり、歴史哲学の素材はこの「生」に他ならない。したがって、「歴史哲学は、(略) 出来るだけこの素材の生き物としての困難さを尊重し、其処に意味とか価値とかいふものに関する、言はば自然の必然性より遙かに高次な必然性を究明しようとする」のでなければならぬ。

以上のように、「歴史について」の大略を追ってみると、とくに「生」を素材とした「意味」や「価値」に関する歴史哲学という発想などには、ディルタイの影を認めざるをえないであろう。また、自然科学的な能力とは異なった能力を用いて、「史料」から人間の姿を想い浮かべなければならぬとする考えも、「生」の体験が表現されたもの(史料)を扱うには、自然科学的な方法による説明ではなく、理解の方法によらなければならないというディルタイ理論に置き換えることができるのである。

しかし、それらを含めて、論全体を眺めると、歴史と自然との截

然たる区別を基調に置く考え方、さらには歴史の本質を一般法則(歴史常数)ではなく個別的事実のみで、その一回限りの歴史事実に尊重しようとする点など、その論全体の骨子は、ディルタイ固有の歴史哲学と言うよりも、むしろ、前述したように、ディルタイもその影響下にあった歴史主義の歴史観に近いものとして捉えるべきである。

まずは、このように小林秀雄の歴史論を性格づけることができると思われるが、むしろ、そこに彼の独創がないと言うのではない。死児を想起する母親の愛惜の情というのがそれであって、むしろ、彼の歴史論の母胎は、そこにあったと言わなければならない。後述するようになり、やがて小林秀雄は、その世界へとひきこもり、その世界を通してのみ歴史の問題を考えようとするのである。

それはともかく、一方、京都学派は、昭和十年代にどのような歴史論を展開していったのであろうか。

四

周知のように、『自覚に於ける直観と反省』(大6・10)や『働くものから見るものへ』(昭2・10)などで、独自の哲学を築きつつあった西田幾多郎も、マルクス主義の興隆と弾圧によるその衰退、あるいは一方でのファシズムの台頭といった、思想的および社会的な情況に促されて、歴史的世界に対する関心を深めてゆき、そして、自己の哲学の主題をその問題に置くようになる。その成果が、『哲学論文集 第三』(昭14・11)や『哲学論文集 第四』(昭16・11)に収められた論文だが、ここでは、それらに所収の「歴史的世界に於ての個物の立場」(思想)昭13・9)と「国家理由の問題」(若

波講座『倫理学』第八冊・昭16・9)によって、西田の歴史哲学について、その内容の一斑に触れてみたい。

西田によれば、歴史は、機械的因果の法則や目的論的連鎖の進行によってではなく、あくまで個の創造によって創られていく。しかし、「個物は個物に対することによって個物である」以上、ライブニッツが「モナドは他を映す、世界を映す」と述べたように、個の中には一般の契機が含まれている。と言うよりも、個の個たる所以が一般との関係においてのみあり得るのだから、個即一般である。ただ、その場合に注意しなければならないのは、ヘーゲル流の過程的弁証法のように、個物を一般者の分裂発展過程として捉えてはならないということである。なぜなら、それでは、「歴史的世界に於ての唯一なる個性的存在とは云はれない」からである。そうではなく、あくまで個に徹しなければならない。むしろ、それによってのみ一般とつながることができるのである。要するに、「歴史的に或時代から必然的に或時代に移つる」というも、自然的因果においての如く一般的法則によるのではなく、かえつて特殊から特殊に、否、個性的なるものから個性的なるものへ移り行くとい得る」のであって、しかも、その「歴史の各々の時代は、絶対の無に接し、各々の時代が存在そのものとして、絶対の価値を有つたものでなければならぬ」。ランケの、「各々の時代が神に直接する」という言葉は、その意味において理解されなければならない。

いま、その一部を切り取つて要約してみたわけだが、西田の歴史哲学の輪郭は、伝え得たと思われる。つまり、西田の歴史哲学とは、歴史における個の価値、各時代の独自性を尊重する歴史主義の立場を踏襲しつつ、さらにそれを、個は一般とつながっているとい

う、一即多の絶対矛盾的自己同一の論理に結びつけたものである。

この結合に、西田の歴史哲学の特徴があるわけだが、そのことよりも、ここで確認したのは、京都学派の領袖たる西田幾多郎も、やはり、昭和十年代のこの時期に、歴史主義をその歴史哲学の中に取り込んでいったということである。もつとも、新カント派が流行した大正年間に発表された「自然科学と歴史学」(大2・6)などで、西田は、合理主義の立場に立ちながらも歴史主義の影響を受けているウインデルバントやリッケルトの歴史認識論の手際よい解説を行っているなど、すでに歴史主義の発想には触れていた。だが、それは、あくまで解説であつて、自己の哲学の主題としたものではなかつたのである。

前述したように、昭和十年前後あたりから、思想界において歴史主義が興隆してくるわけだが、西田に限らず、他の京都学派の哲学者達も、その立場に立つた歴史論、あるいは歴史哲学を展開していったのである。代表的なものとしては、さきに紹介した田辺元の『歴史的现实』、高坂正顕の『歴史的世界』、さらには、哲学者ではないが、「近代の超克」や「世界史的立場と日本」の座談会に京都学派の歴史家として出席した鈴木成高の『歴史的国家の理念』(昭16・8)などをあげることができる。また、やや後になるが、高山岩男の『歴史主義の問題と世界史』(思想) 昭和17・2・3)も、その立場を鮮明に出した歴史論と言えよう。もつとも、西田と田辺との間に見られるように、弁証法の捉え方の相違からくる理論上の対立や、あるいは、それぞれの研究対象の違いからくる内容上の相違など、京都学派内部でも、その主張は一樣ではなかつた。しかしながら、たとえ、歴史論ではなく、文化類型学を論じた高山の

『文化類型学研究』(昭16・7)に、「各時代に直接する絶対性が存するやうに、各民族文化には価値上の比較を絶して神に直接する絶対性が存する」と述べられているように、主張や研究対象の相違を越えて歴史主義的立場は貫かれていたのである。つまり、歴史主義は、京都学派の最大公約数だったと言えるのである。

さて、このように、小林秀雄と京都学派といった、文学界、思想界の中心的存在が、昭和十年代に歴史主義の立場に立った歴史論を展開していったのであるが、その思想的な意義については、とくに述べ述べる必要はないであろう。鈴木成高は、『歴史の国家的理念』所収の論文「進歩主義と歴史主義」の中で、進歩主義は、歴史を単線的な進歩過程と見る立場から、各時代を進歩の一階梯としてのみ位置づけて、歴史事実をすべて進歩の一般法則の概念の下に置くが、それに対して、歴史主義は、「各時代がそれみづからの原理において絶対であり」、「事実が思想以上の真実であり、あるがままの事実理由は越えて妥当であるといふ、事実の独自性の樹立」を主張したと述べている。鈴木は、西欧思想史の観点から歴史主義の意義を論じているのであるが、これは、そのまま昭和の思想史に置き換えることができる。言うまでもなく、進歩主義に相当するのが昭和のマルクス主義であって、小林秀雄や京都学派の歴史論は、西欧思想史における歴史主義とほぼ同様の思想的意義を持っていたのである。

たしかに、それは、昭和のマルクス主義の歴史論、すなわち、「後代の歴史が前代の歴史の目的とされるやうになる」(ドイツ・イデオロギー)歴史観を否定したマルクスの慎重な配慮を省みる

ことなく、単純な進歩主義の立場に立ち、硬化した歴史の必然性の思想を語った昭和の唯物史観に対しては、有効な解毒剤の役目を果たしたと言える。しかし、その反面、その歴史論が当時の現実、すなわち戦争下の現実に適用された時には、逆に毒性を孕んだものとなったのである。

小林秀雄と京都学派は、歴史論を介して、マルクス主義の思想に對しても、そして、ファシズム下の現実に對しても——ただし、後者に関してはある時点まで——いわば共同歩調をとったのである。

五

日中戦争下の非常時の社会に對する小林秀雄の姿勢は、日華事変勃発以後、目立って増えはじめた社会時評風のエッセイ、とりわけ、歴史論と同時進行の形で語られていた昭和十四、十五年頃のエッセイに見ることができる。

「今日は、事実が思想を迫り越して、先きへ先きへと進出」(「疑惑」昭14・4)。それは、いわば「無気味な正体を現した」(物の動き)「(神風といふ言葉について)昭14・10」に似ているが、「さういふ時に、机上忽ち事変の尤もらしい解釈とか理論付けとかが出来上るから安心だといふ様な事で一体どうなるか」。「大体、自然科学に於いては、従来の知識といふものを土台として、これを頼りにして新しい知能を、その上に積み上げて行くといふ建前で間違ひはないのだが、歴史ではさうは参らぬ」。したがって、非常時においては、論理に頼って朝鮮出兵に失敗した秀吉ではなく、桶狭間の戦いの信長のように、「難局を直かに眺め」、「難局と鏡との間に、難局を解釈する尤もらしい理論の如きものを一切介在させな」(「事変

の新しさ」昭15・8）いことが大切である。

つまり、小林秀雄は、理論に頼らず、現実を直視し、それと一体化せよ、と語っているのである。こう語る彼の中に、理論やイデオロギーを一切口にせず、「黙つて事変に処した」（『疑惑Ⅱ』昭14・8）国民への信頼感があったことは疑い得えない。あるいは、「イデオロギイに対する嫌悪が、僕の批評文の殆どただ一つの原理だった」（『ガリア戦記』昭17・5）という「様々なる意匠」以来の一貫した姿勢が、ここにも流れているとも言えよう。小林秀雄は、その信頼感と「原理」とを支えに、非常時に対処しようとしたのである。そしてたしかに、理論ではなく現実を、という対処法は、一般的には、非常時における一つの知恵ある行き方であることには間違いない。しかし、その非常時が戦争下の現実であったことを考えると、やはり、そこにはある危うさがつきまとうと言わざるをえない。その危険性は、「事変の新しさ」の中の次の言葉からもうかがわれよう。

小林秀雄は、「ロヂックといふものは抽象的なものであり、メカニックなものであり、それが具体的な生きた現実には、どの程度まで当て嵌まるか、それが、現実をどの程度まで覆ふに足りるか、そんな事が問題ではない。（略）話が逆様なのである。」と述べ、そして、こう語っている。

ヘーゲルが、或る日山を眺めてゐて「まさにその通りだ」と感嘆したさうです、さういふ話が伝はつてゐます。この逸話は

「凡そ合理的なものは現実的であり、凡そ現実的なのは合理的だ」といふあの有名な誤解され易い言葉より、ヘーゲルの思想を直截に伝へてゐる様に思はれます。

むしろ、ここで小林秀雄は、ヘーゲルを誤解しているのではなく、ヘーゲルが現実を「まさにその通りだ」としたのは、「ロヂック」が現実の中に具現化されていると考えたからである。言い換えれば、ヘーゲルが肯定するのは、現実のうち存在する理性的なものだけなのである。現実を理性的実現過程として捉えていたヘーゲルにとつて、現実はその意味においてのみ妥当なものであったわけだが、小林秀雄は、そのヘーゲルの言葉を、現実そのものの妥当性を肯定する言葉として捉えているのである。

つまり、理論ではなく現実を、というのは、行きつくところ、現実の容認、さらには現実の全的肯定となるのである。

そして、そこに介在していたもの一つに、彼の歴史論があったのではないかと思われるのである。さきに、「事実が思想以上の事実であり、あるがままの事実は理由を越えて妥当であるといふ、事実の独自性の樹立」を主張するのが歴史主義である、という鈴木成高の言葉を引いておいたが、小林秀雄のヘーゲル解釈から透けて見えるのは、その歴史主義的な発想である。事実そのものの妥当性、その独自性の尊重が、過去の歴史に向けられた時には、「歴史について」で見たような「歴史上の一事件の掛替への無さ」という考えになるのだが、一方、現在の歴史に向けられた場合には、今ある現実の肯定へと赴くのである。しかも、その現実とは、戦争下の現実だったのである。

このように、危険性を含んだ、非常時における小林秀雄の対処法は、彼の歴史論といわば論理的に通底していたと考えられるが、おそらく、それが表面にあらわれ出たのが、「文学と自分」（昭15・11）の次の言葉である。

刻々に変る歴史の流れを、虚心に受け納れて、その歴史のなかに己れの顔を見るといふのが正しいのである。日本の歴史が今こんな形になつて皆が大変心配してゐる。さういふ時、果して日本は正義の戦をしてゐるかといふ様な考へを抱く者は歴史について何事も知らぬ人であります。歴史を審判する歴史から離れた正義とは一体何んですか。空想の生んだ鬼であります。

この言葉に、私達は、歴史的事実の妥当性を肯定する歴史主義の命題を、明確に読みとることができらるであらう。泥沼化していく日中戦争、さらには世界大戦へと傾斜していく日本の「歴史の流れ」は、小林秀雄においては、こうして「虚心に受け納れ」ていかれたのである。

そして、このような現実肯定の論理は、小林秀雄と同じく歴史主義的な歴史論を語っていた京都学派にも見られるのである。たとえば、「良心とは抽象的理性的自覚ではない。日本人なら日本人としての、此時此場所に於ての自覚でなければならぬ。」（『国家理由の問題』）と語って、結局は、戦争下の現実を生きている「日本人」を肯定した西田幾多郎、さらには、

歴史を現実と離れた理念で批判する事は許されない。（略）批判が現実の外に前提した規準から行はれるなら、それは現実から浮いてしまふ。我々はかゝる態度を捨てねばならぬ。

と述べて、京大の学生に、戦争批判の禁止を説いた『歴史的现实』の田辺元である。この田辺の言葉は、「文学と自分」の中的小林秀雄の言葉にそのまま重なるであらう。京都学派の学者達も、まず歴史的现实そのものの肯定から出発して、戦争に対処しようとしたのである。したがって、非常時における対処法においても、

些々たる意見や立場に縋つて、狹量なる概念を主張し宣言することよりも、深く事物の奥底を見究める静かなる叡智こそ、現代を導く唯一の指導者でなくてはならない。（鈴木成高「歴史的国家の理念」△『歴史的国家の理念』所収▽）

というように、さきに触れた、論理に頼つた秀吉ではなく、現実を直視した信長に、非常時におけるあり得べき指導者の姿を見た「事変の新しさ」の小林秀雄と、同様の論理が語られてくることになるのである。

このように、小林秀雄と京都学派は、相通じ合う歴史論を介して、戦争に対しても、接近した立場にいたのである。しかしながら、やはりそこには、相違があったことは言っておかなければならない。ともに現実（戦争）を肯定しながらも、小林秀雄の論理がそこに留まるものであったのに対して、京都学派のそれは、そこからさらに進んで積極的に現実（戦争）を正当化する論理を内包していたのである。つまり、京都学派の哲学者達は、現実（戦争）をまず認め、そして、さらにその中に当為をも認めようとしたのである。

この現実即当然（田辺元）の論理は、京都学派の周辺にいた柳田謙十郎の証言にあるように、戦争の帝国主義化を抑えようとする意図から出たものでもあったのだが、戦争は帝国主義的なものではあつてはならないというその当為と、一方で現実の妥当性を認める論理とが結合して、結果的には、現実（戦争）には当為（反帝国主義）がすでに含まれているという戦争正当化の論理として機能したのである。

しかし、そういう相違はありながらも、「空想」（小林秀雄）、あるいは「現実から浮いてしまふ」（田辺元）という言葉によって、

戦争の批判を一切封じ、結局は、戦争を肯定した点において、小林秀雄と京都学派が共通していたことは、否定できないであろう。さらに言うなら、現実には即けと語った両者は、実は、ともにその現実の眞の実態が見えていなかった点においても共通していたのである。

六

しかし、小林秀雄は、やがてその現実の実態に気づいていったと思われる。昭十六年あたりを境に、社会時評風のエッセイはほとんど書かなくなり、「歴史と文学」（昭16・3、4）や「伝統」（昭16・6）などで歴史を語っても、戦争という現実の歴史的事件についての直接の言及はあまりしなくなる。彼は、いわば現実を背を向けるのである。それにもなつて、彼の歴史論も変化してくるのである。と言つても、「人間がゐるなければ歴史はない」、「歴史は決して二度と繰返しはしない」（『歴史と文学』）という言葉や、「歴史上の客観主義」を批判している箇處を説めばわかるように、その歴史論の大枠には変化はないのだが、その枠組の中で、微妙な変化を見せてくるのである。

「歴史について」では、人は、「与へられた史料をきつかけとして、歴史事実を創つて」おり、「僕等は未来への希望に準じて過去を蘇らす」と述べられていた。つまり、過去は、未来や現在との相関関係において捉えるものであり、したがつて、過去は時代の推移とともに、いわば新たに、解釈されるべきものとしても考えられていたのである。しかし、この動的な歴史像は、静的な歴史像へと変化して行く。それは、死兎の姿を想起する母親の愛惜の念だけが歴史を蘇らせる糧なのだ、とする小林秀雄本来の歴史像の世界への還

帰と言つてよい。そこにおいては、死兎の姿、すなわち、過去は、解釈を拒絶して動ぜぬものとなるのである。また、「歴史について」では、過去の絶対性は出来事の一回性ということに求められていたが、ここでは、さらにそれを完結性に求め、過去は完結しているが故に、絶対であり美しいというふうになつてくるのである。すなわち、「歴史には死人だけしか現れて来ない。従つて退つ引きならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ。」（『無常といふ事』昭17・6）というふうになる。むろん、そうなると、時は静止し、歴史における生成、変化は認められなくなる。「歴史と文学」の中の言葉で言えば、「お月様はいつもお月様であり、すつぽんは永遠にすつぽんであるところに、実は歴史の一番深い仔細はあるのだ。」となるわけである。

このように昭和十六年あたり以降、小林秀雄は、静的で観想的な歴史観を深めていたのであるが、こうなつてくると、京都学派の歴史論とは、共通点を有しながらも、くい違ひを見せてくるのである。その相違が浮き彫りにされたのが、座談会「近代の超克」（昭17・7）における歴史論をめぐる二者の論議であつた。

相違は、小林秀雄が歴史における不易性を強調するのに対して、西谷啓治や鈴木成高は不易性とともに変易性を主張する、というふうな対立となつてあらわれた。もっとも、両者は、論理的には、さほど異なつたことを語つたわけではなかつた。むしろ、「傑物は時代に屈服はしないが、又、時代から飛び離れはしない、あるスタチックな緊張状態にある。」ので、その意味で、歴史上の古典や大作家には「アナロジー」が見えるという小林秀雄の発言は、「何処迄もその生きたその時代といふものを生抜いて行くから、永遠なもの

にぶつかつて行く。」という西谷啓治の言葉と通じるのである。また、小林秀雄自身も、「変らないものに永遠性があるのでなく、変るものの中に永遠性がある」という鈴木成高の言葉を、「それさうだと思ひます。」と肯定している。つまり、両者ともに、變りゆく歴史の中の各時代の永遠性、したがって歴史における不易性を認める歴史主義的な立場では共有する部分を持ちながらも、小林秀雄の方は、「何時も同じものがあつて、何時も人間は同じものと戦つてゐる——さういふ同じもの——といふものを貫いた人がつまり永遠なのです。」と、その不易性のみを強調したのである。

両者は、いわば力点の置き所が異なっていたわけだが、それは、過去(古人)の絶対性に対する捉え方にも見られる。すなわち、小林秀雄は、「古人は違ふものに達しちやつたんです、古典はね。」というように、完結した過去の絶対性をただ仰ぎ見るのに対して、たとえば西谷啓示は、やはりその絶対性を認めるのではあるが、「自分といふものが置かれてゐる現実の生活といふものから離れて果して昔の人の歩いた道が本当に掴めるか」というふうに、それを現在との関係においても見出そうとするのである。それは、過去に対して、現在からの解釈を拒絶する者と、解釈を認める者との相違と言つてもいいであらう。

静的で観想的な歴史観へと傾斜していった小林秀雄は、歴史論において、京都学派とこのようなくい違いを見せるのだが、おそらく、その相違は、両者の現実に対する姿勢と関連していたと思われるのである。つまり、現実を背を向けた者と、いまだ現実に積極的コミットしようとしていた者との相違が、両者の歴史論の相違に投影しているのである。前者が不易なものや絶対的な過去へと赴き、後

者が変化や現在をも視野に入れようとしたのは、あるいは、当然のことであつたと言えるかもしれない。

ともあれ、こうして、小林秀雄と京都学派は、その共同歩調の足並みを乱したのである。

そして、これ以降、小林秀雄は、ますます古典の世界へ沈潜していったのに対し、京都学派、とりわけ西谷啓治らのグループは、前述した現実即当の理論に乗つて、さらに積極的な戦争正当化への道突っ走していったのである。その両者の距離は、昭和十八年一月号「中央公論」の座談会「総力戦の哲学」と同年二月号「文学界」の「実朝」との間に見ることが出来る。

〔注〕

(1) 『近代日本思想史講座』第一卷(筑摩書房、昭34・7)所収。

(2) たとえば、「デイルタイ著作年譜」(昭9・1)、「デイルタイと現状独逸哲学」(昭9・10)、「若きデイルタイ」(昭11・1)、「デイルタイ哲学」(昭12・1)など。

(3) 代表的なものとしては、樺 俊雄「歴史的時間」(昭10・2)、由良哲次「歴史的真理と歴史の認識の方法」(昭10・7)など。その他、本文中にあげた高坂正頭の『歴史的世界』所収の論文なども掲載されている。

(4) 「解釈学の成立」(昭7)、「記述的分析の心理学」(同)、「詩と体験」(昭8)、「独逸精神史研究」(同)、「歴史と生の哲学」(昭9)、「近代美学史」(同)、「体験と文学」(昭10)、「世界観の研究」(同)、「世界観学」(同)、「世界観の類型」(同)、「想像力の分析」(昭12)など。

(5) むろん、ここで言う歴史主義とは、ドイツ・ロマン主義を背景として生まれ、ランケ、サヴィニーを頂点とする流れをさす。カール・ポパーが「歴史主義の貧困」で扱っている、ヘーゲルなども含めた広義の歴史主義ではない。

(6) 丸山真男『日本の思想』（岩波書店、昭36・11）、橋川文三「歴史意識の問題」（『近代日本思想史講座』第七卷、八筑摩書房、昭34・11V所収）が、すでにその問題についての詳細な論を展開している。しかし、両氏とも、小林秀雄のみを特筆して論じており、京都学派についてはほとんど触れていない。

(7) 柳田謙十郎『わが思想の遍歴』（創文社、昭26・12）。

—— 広島文教女子大学講師 ——